

農村部落に於ける血縁的紐帶の一事例

石 川 武 彦

(山形大学農学部農業経済学研究室)

An example of the Family connection in local village.

日本の民主化は従來の家族制度を解体した。日本の家はもはや戸主権、家督相続、夫の妻の財産管理というような制度から解放されて、自由を尊重し平等關係に於てのみ認められた親子夫婦の共同生活の場所となつたのである。すなわち家を永遠なる生命の所在と意識し、親子關係の無限の連続がこれを維持するという東洋流の考え方では、日本の家を想定することはできなくなつたのである。

日本の農村特に東北地方の農村のように家族中のものが農業に従事しているところの家は、家が經營の單位であつて、家を單に社会的、倫理的な組織とのみ見ることはできない。だとすると民主化による家の社会的倫理的解体が經營單位たる家に如何ように影響を与え、そしてそれが日本の農業經營乃至農村社会を如何ように変革するかは、農政上充分考究の價值があることのように思われる。

農地改革に依つて既に封建的大家族主義では家が維持されなくなり夫婦を中心とする小家族制に改つたとしても、農村に於ける血縁的紐帶關係は終熄してはいない。その血縁關係についての意識が農業經營にどう妨ぐかはこれからのことである。

すなわち従來血縁關係の中に貫かれていた家に対する倫理觀が、如何なる紐帶現象となつて現われるか、單なる思いつきだけで言うならば、彼等は血縁相互間に協力扶助の形を採つて共存共榮型となるか或は血縁關係間に1つの指導的家を作つて、それを中心に力を結集して、従來の大家族制に似た状態を現出して地主的經營を行うことになるか、或はまたこれらとは全く異つて家々の血縁的紐帶が稀薄になつて、家はそれぞれ切り離された個々のものとなるか、その何れかであろう。

調査した地方では4町歩以上の耕作者があつて、經營形態は従來の如き家族的に行われているに拘わらず、家の内部に於ては民主的に横に繋がらんとする家族員を包含している例が多い。これらは日本農業の將來性に関連を持つものとして農政上の問題として取上げ得ると考える。

この小文は農地改革による農村社会及農業經營の変遷という課題の一部としてなされたものである。農村に於ける血縁的紐帶の事例を本縣東田川郡黒川村の宝谷部落にとつた。

(1) 部 落 の 概 況

(1) 部落の位置： 鶴岡市から東南に向つて10軒のところに黒川村の役場がある。それから更に村道を東南に向つて4軒半ひた登りに登り詰めたところに高台があつて、そこにある部落が宝谷である。詳しくいうと東經 139°55'~140°2' 北緯 38°37'~38°42' 標高 262 米ということになつている。

(2) 交通： バスは鶴岡から松根線の宮前まで、それから徒歩か自転車によるより外はない。トラックは鶴岡から宝谷分教場のところまで通っている。冬期間は積雪丈余に及ぶので小学校の児童達は六年まで分教場で済ます。冬を除いては三年まで分教場でやつて四年から黒川の本校に通うことになっている。冬季は無論スキーが唯一の交通用具である。

(3) 戸数と人口： 昭和26年5月現在戸数47世帯数49全部農家で、うち24戸が製炭兼業の農家である。人口は322人で男子が160人女子が162人男女の釣合はよくとれているが、分教場の生徒数を調べて見ると女子の数がずつと多く総数の65.5%となつている。

分教場学年別性別生徒数

性別	総数	1年	2年	3年	4年	5年	6年
男女計	21	3	3	1	4	6	4
	37	5	7	7	6	6	6
	58	8	10	8	10	12	10

この表については後で触れることになると思う。1戸当家族員数は6.6人であるから山形県の農家平均よりも少なく、庄内平原部の夫れに比べると更に少ない。日本全農家平均6.2人に比して稍多い。

(4) 耕地状況： 水田48町6反2畝、畑2町8反6畝、合計して51町4反9畝である。この外に山畑と言つて原野や山を開墾して畑らしくしているのが4町歩もあろうかと思う。なお耕地拡張可能地は20町歩に及ぶと言われている。これを耕作廣狹関係から見ると次のようになる。

廣狹区分	2町	2~1.5町	1.5~1町	1町~5反	5~3反	3反以下	計
農家戸数	1	7	17	19	1	2	47
専業戸数	1	6	13	11	—	—	31
兼業戸数 (総農主 農以外主)	—	1	4	8	1	2	16
	—	1	4	8	1	1	15
	—	—	—	—	—	1	1

5反~1町5反耕作の農家数36戸総数の77%で1町前後に集中している。最も廣いのは2町4反である。副業は製炭であるが1町歩以下の農家の4割以上がこ

れに従事している。自作19戸、自作兼小作34戸、小作兼自作4戸、純小作は1戸もない。米の供出量は480石割当製炭量は5千貫となつている。米の反当収量は約2石で、平野部に比して可成り少ない。

(5) 家畜： 牛32頭、馬7頭、綿羊4頭、山羊3頭で、兎は各戸に飼養し農家の70%は養鶏を行つている。牛馬共にない戸数は3戸で1戸3頭を飼養している農家もある。四周山や原野で囲まれているので採草には至便である。

(6) 農機具： 電動機27台、精米機19台、米撰機20台、内燃発動機1台、精粉機13台、藁打機7台、動力人力兼用製繩機5台、馬鋏20、畜力用鋤22、碎土機21万石45等であつて、1町歩以上の耕作農家には各種の農機具が各戸毎に設備されている。

以上のことから観ると宝谷部落は玉葱と果実を除けば、主食蔬菜及燃料については完全に自給村と言つてよい。

(7) 開村由來： 安政黒川風土記(樺出部落、飢持久義氏所持)によると文治5年(西紀1189)武藤小次郎資頼が頼朝から庄内領を賜つた時、武藤氏に従つて來た畠山重忠の弟大学重則が宝谷の郷士とな

つたのが同村の祖だとしている。恐らくこれが一般に信ぜられて口碑に傳わつたものと思われるが、畠山氏の末裔と傳えられる畑山喜太郎という人から、昭和4年に戸籍訂正の許可申請が出されておる。申請の趣旨は申請人の姓は今畑山となつて居るけれども、これは先祖が無学のために畠山と書くべきを畑山として仕舞つたのである。申請人の家は畠山重忠の末であると言ひ傳へられているだけでなく、菩提寺の過去帳には寛保2年(1742)畠山仁助の名がのつて居り、また申請人の家墓碑には文政6年(1823)以降畠山と刻まれて居るなどの事跡から畑山を畠山に改姓して貰いたいと言うのである。畠山と畑山との関係は以上で判るが、畠山重忠父子が誅せられたのは元久2年(1205)で、それまでは源家にとつては重臣であつたので、弟大学が郷士に下つて宝谷に住むようになったのは重忠死後のことで、その後士分を離れて農方になつて土着したものであろうか、しかしこの推測は畠山重則の庄内入を前提としてのことであるが、口碑であつて歴史上の考証は私にはまだ見当らない。黒川村の見性寺は宝谷の住民が檀家になつて居るのであるが、この寺の過去帳には元文3年(1738)から宝谷部落の人達の戒名がのつている。そこで今から214年前宝谷には五十嵐、小野寺、畠山、遠藤、森、矢口、佐々木、本間、小泉の姓を名乗る家があつたことは事実である。寺が大災に遭つて居るので惜しいかなそれより以前のことは判らない。平民に苗字を許したのは明治3年9月の太政官布告からであるから、それ以前宝谷の百姓達に苗字がついて居たということは、口碑にあるように確かに郷士の果であるように思われる。これからしても宝谷での血縁的紐帯関係には常の百姓とは異つた、何処かに武家的なものが残つて居たのではあるまいかとの想像もつくのである。なお口碑の1つには宝谷に初めて移住した人は矢口五郎右門と言つて鶴岡の堂方在住の佐藤氏の分れであるというのがある。その來歴は判らないが見性寺の過去帳について調べると、この五郎右門という人は延享元年(1744)に物故しているが、過去帳には五郎右門の分家で権右門という人が、それより以前寛保2年(1742)に既に物故している。この口碑は畠山のそれに比べて600年も新らしい。

佐々木氏に就いては飽海郡誌によると近江国蒲生郡佐々木源三秀義の支流石見守綱利が延文5年(1356)に法華僧日陣弘法のために羽黒山に下向した際これに隨つて來て鳥海山麓宇七堂に居住して田畝を拓いたので住民が多く集つて吉出村が創始されたとあるが、これと宝谷の佐々木氏とどういふ関係があるかはまだ詳かにしていない。

また部落の上手に洞穴があつて傳説では穴居の跡だとされているがまだ考証はあがつてはいない。在住の遠藤謙光氏の倉庫には右文書が藏されて居たというが、火災に遭つて焼失したのは遺憾である。

要するに口碑はいろいろあるにしても、見性寺の過去帳は確かなものと見るべきで、それにある戒名からして今より214年前宝谷には五十嵐、小野寺、畠山、遠藤、森、矢口、佐々木、本間及び小泉の9の姓があつたことは信ぜられるが、この中でどの姓を名乗る人が村の開祖であるかは不明で、なお初めに1戸だけ來たものか、或は数戸が同時に移住したものかも明らかでない。それは兎も角としてその当時はどういふ辺鄙なところを選ばなくとも、平原部にいくらか開拓の余地は残つて居たように思われるところから想起されることは、よく移植民の動機のうち数えられている消極的動機のことである。す

なわち外部からの圧迫とか災害とかのために、他所に安住の地を求めたいという念慮である。イスラエル人が埃及逃亡の如きはその著しい例であるとされている。

封建時代では藩主の更改によつて藩制が著しく変わるのが例であるから、庄内に酒井氏が封ぜられ、その入部以來収納法を制定して、5ヶ年の作合を勘考の上税率を作つて年々の収納高を定めたが、これに依ると税額が従前に比して多くなつたので、不満の農民は家を挙げて他郷に移つたと、出羽飽海郡誌巻9には書かれているが、これは消極的動機による移住に数えられる。しかしこの移住が何処に行われか不明であるし、これと宝谷部落の成立との関係の有無は無論推定もできないが、酒井氏の入部は元和の年間(1615~1623)であるのと、前述した口稗のうちで失口姓の人が鶴岡から分かれて移住したというのがあり、見性寺の過去帳の年代(これは寺焼失後の過去帳である)と照合して、上に述べた海極的動機による移住も、何等かの関係があるやの気もするのであるが、勿論判定は下し難い。部落開祖の拴索は兎も角として、この部落は積極的動機による移住によつてできたものとは考えられない。と言うのは庄内地方では農民の間で霊場巡りと言つて、連中を募つて霊場を遍歴して、霊場の個所個所に札ウチと言つて札を置く風習が残っているが、宝谷部落のうちにはこの札ウチをしないことになつているものもあるので、これは恐らく世間を憚ることから生じた習慣ではあるまいか。何んとなく隠遁者の性格を帯びているような気がする。

(2) 血縁的紐帯の実情

1. 明治初年頃の血縁的紐帯の実情

明治8年(1873)と10年(1875)の両年に於ける血縁的紐帯を明らかにするに當つて、先づその当時の部落の実情を究明しておく必要がある。この調査は黒川村役場備付の酒田縣第3大区3小区戸籍之拾

	明治8年	同 10年
男女計	75 75 150	74 72 146

に拠つたものである。

(1) 先づ人口について見ると人口は8年よりも10年の方が却つて減つている。が男女の比率はほぼ一致している。なお明治8年について年齢階級別に人口を見ると左表のようになる。

	14才以下	15~39才	40~79才	80才以上	計
男女計	22 23 45	33 30 63	17 21 38	— 1 1	72 75 149

註 人口總數と年齢別の總數とは一致しないが戸籍簿のまま計上した。

これから見ると昭和26年6月現在の人口は322人であるから77年間に172人、1年平均2.2人の増加になつている。なお立入つて言うと人口増加の傾向は終戦後に格段と顯著になつたのであつて、終

戦前までは増加は1年平均2人に達していない。すなわち昭和21年の人口は290人だから71年かかつて140人1年平均2人足らず増したことになるが、昭和26年の人口は322人で21年からすると32人1年平均5.3人を増したことになる。然して最近6ヶ年の傾向は男子に比して女子の数が毎年多い。このことは前掲分教場の生徒数調と傾向が同じである。

(2) 戸数と姓：前掲戸籍簿について当時の戸数及姓について見ると戸数は22戸、姓は小泉、小野寺、

五十嵐, 佐々木, 遠藤, 本間, 矢口, 畑山, 森の9で姓の数は見性寺の過去帳に現われた214年前後のものに比して少しも増減がない。ただ200年間これらの戸のうちに分家を構えたものもあるので戸数が増加したのである。この9の姓のうち小泉と本間のみは当初の戸数のままであるが, 他の7姓のうち小野寺, 五十嵐, 佐々木は各1戸, 遠藤, 畑山, 森は各2戸, 矢口は4戸の分家を作っている。これらの姓は番地が隣接しているので恐らく屋敷内とか近接所有地内に分家したものである。分家のうちには二男三男の血族的分家もあるが, 「ワヤモチ」と言つて長く忠勤を励んだ作男に褒賞として分家せしめたものもある。各姓と戸の番地を対照すると次のようである。

(イ) 血縁関係: この22戸について明治8年の戸籍簿に現われている養子縁組と婚姻関係を調べて見ると, 先づ部落内で

姓	小泉	小野寺	同	五十嵐	同	佐々木	同	遠藤	同	同	本間
番地	2	3	19	4	14	5	7	8	9	13	6
姓	矢口	同	同	同	同	畑山	同	同	森	同	同
番地	10	11	12	15	21	16	17	18	20	22	23

行われた頻度は20で14戸数に及んでいる。この表で見ると同部落内で行われた養子縁組は4戸で少ないが同部落内での娶入が8戸で, そのうち2戸は戸主の妻も長男の娶も同部落内から娶入つて来たものである。

表 1

戸番地	養子	養女	嫁入
2	—	—	1
5	1	—	—
8	—	—	1
10	—	1	—
11	1	—	1
13	—	—	1
14	—	—	1
15	1	—	1
16	—	—	—
20	1	—	1
22	—	—	1
23	—	—	—
計11	4	1	8

表 2

戸番地	養子入	嫁入
2	1	1
3	1	—
4	—	1
5	1	1
6	1	1
7	—	3
8	1	1
9	1	1
10	1	1
11	—	—
12	1	2
13	—	—
14	—	1
15	—	1
20	—	1
17	—	2
18	—	—
21	—	1
22	1	1
23	1	—
計19	10	19

他部落から宝谷部落への養子入嫁入の状況を示すと2表のようである。すなわち明治8年の戸籍簿に現われている他部落からの養子入及び嫁入があつた戸数は19戸で養子入が10人, 嫁入つて来たものが19人である。この嫁入のうちで戸主の母親も戸主の妻も長男の妻も他部落からというのが1戸, 戸主の妻と長男の妻とが他部落というのが2戸になつている。この部落では一般に男子が少ないので養子の貰い受けは部落内で不足なために他部落に仰いでいることが判る。嫁については部落内からの分と他部落の分との間に数の上でさ程の差がない。

表 3

戸番地	養子	嫁出
3	—	1
9	—	1
10	—	1
13	—	1
14	1	—
15	—	1
18	—	1
21	—	1
22	—	1
23	1	—
計9	2	8

次にこの部落から他部落への養子出と嫁出の状況を見よう。養子出は2件嫁出は8件で養女は1件もない。しかもこの8件の嫁

出のうち3件は鶴岡、湯の浜及び湯田川の娼家への嫁出であるから、これを除いて附近の農家に嫁したものは5人だけになる。養子や嫁とりは部落内で自足が出来ず、不足分を他部落に仰ぐ事情の下では他部落へ行く余裕はない筈で、他へ転出するのは特別な事情又は関係からであろう。

次に明治10年の事情を示さう。事情は明治8年とそれほどの違いがない。他村へ復籍して養子となつたのが1件、他村へ養子縁組したのが1件、他所への嫁入1件、部落内からの嫁取りが1件、他部落から

表 4

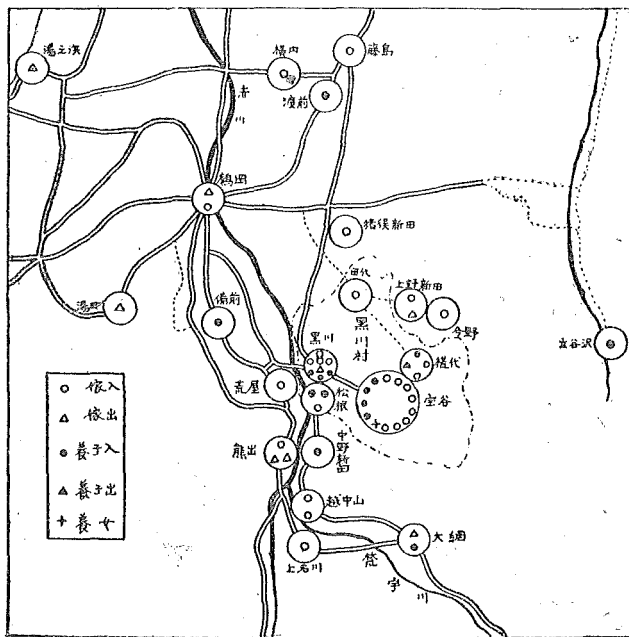
戸番地	明治8年	明治10年
2	6	5
3	6	8
4	7	7
5	6	7
6	11	11
7	8	8
8	9	10
9	8	11
10	12	12
11	8	12
12	5	5
13	10	10
14	7	7
15	4	4
16	4	5
17	5	6
18	8	9
19	5	7
20	6	4
21	8	9
22	8	9
23	5	5
計	156	170

からの嫁入りが1件、合計5件の移動があつたに過ぎないが娼妓になつたために他所へ寄附となつたものが2人あつて、その1人は遠く北海道小樽に出嫁地を求めている。

明治8年と10年の両年について家族員数を比較して見よう。

註。戸籍簿の総数と年齢別統計による総数との間には数字の不一致があることは先きに指摘して置いたが、家族員数統計の総数にも不一致があるが、この場合も戸籍簿面通りにして置いた。家族員数統計によると戸籍簿面の総数に比べて8年には7名10年には13名も多くなつてきて10年の方が寧ろ2名も多く前掲の分に比べて逆になつている。

次に他部落からの養子縁組、娶とりの範囲はどうかと言うと、その範囲は宝谷を基点として17軒の地域内で、而も庄内で最も重要な道路である溝川、藤島を経て六十里越の縣道線に沿うて散在して居り、距離が大きくなるに従つて頻度は漸減している。交通が発達せず、特に冬季積雪期間に於ける交通は著しく不便であるため、娶とり婿選びの機会が附近の地域内に需めるより外はない。



そこで血縁的紐帯は部落内から拡大して附近部落に及んでいるのである。明治8年現在に於ける在籍者について婿嫁とりの頻度と範囲を図示すると次のようである。

明治8年宝谷部落22戸内在籍者に就いての養子養女縁組及び婚姻の頻度52件のうち、宝谷部落内で行われているのが13件で総件数の25%、黒川村内に取ると29件で総件数の56%に当る。すなわち縁組婚姻による血縁的紐帯は宝谷部落を中心として4軒の範囲に密集して、その残り44%が最大距離17軒を半径とする円周内の17部落に散在して

表 5

部落名	養子入	養子出	嫁入	嫁出	養女	計
湯鶴湯	—	—	—	1	—	1
之田	—	—	—	1	—	1
濱岡	—	—	—	—	—	—
川内	—	—	—	—	—	—
島前	—	—	—	—	—	—
新田	—	—	—	—	—	—
野屋	—	—	—	—	—	—
出山	—	—	—	—	—	—
網代	—	—	—	—	—	—
黒川	—	—	—	—	—	—
根代	—	—	—	—	—	—
谷	—	—	—	—	—	—
計	14	2	27	8	1	52

表 6

	嫁入	嫁出	養子入	養女入	養子出
黒川	7	—	4	1	—
宝村	4	5	1	—	3
内川	1	—	—	—	—
渡根	3	4	—	—	—
代	1	1	—	—	—
代	2	5	—	—	1
本俣	4	2	2	—	—
網	2	—	—	—	—
川	1	1	—	—	—
出	4	—	—	—	—
川	1	—	—	—	—
山	2	—	—	—	—
添	4	—	—	—	—
追	2	—	—	—	—
荒	4	3	—	—	—
西	2	1	—	—	—
板	2	—	—	—	—
金	1	—	—	—	—
新	—	—	—	—	—
谷	—	—	—	—	—
高	—	—	—	—	—
山	—	—	—	—	—
代	—	—	—	—	—
坂	—	—	—	—	—
谷	—	—	—	—	—
嶋	1	1	—	—	—
原	—	2	—	—	—
寺	4	5	—	—	2
内	1	—	—	—	—
林	—	—	—	—	—
新	—	2	—	—	—
田	—	1	—	—	—
代	—	—	—	—	—
野	1	3	1	—	—
木	—	—	—	—	—
田	—	—	—	—	—
色	1	—	—	—	—
村	—	1	—	—	—
平	—	—	—	—	—
谷	—	—	—	—	—
六	—	—	—	—	—
島	—	—	—	—	—
川	—	—	—	—	—
田	—	—	—	—	—
藤	—	—	—	—	—
湯	—	—	—	—	—
京	—	—	—	—	—
鶴	—	—	—	—	—
塞	—	—	—	—	—
宮	—	—	—	—	—
東	—	—	—	—	—
計	(7) 57	55	(4) 19	(1) 1	16

いることになる。前述したようにそのうちの湯の浜、鶴岡及び湯田川の3個所に行われた婚姻は娼家なので普通の婚姻とは受けとれないから円周はもつと狭められることになる。

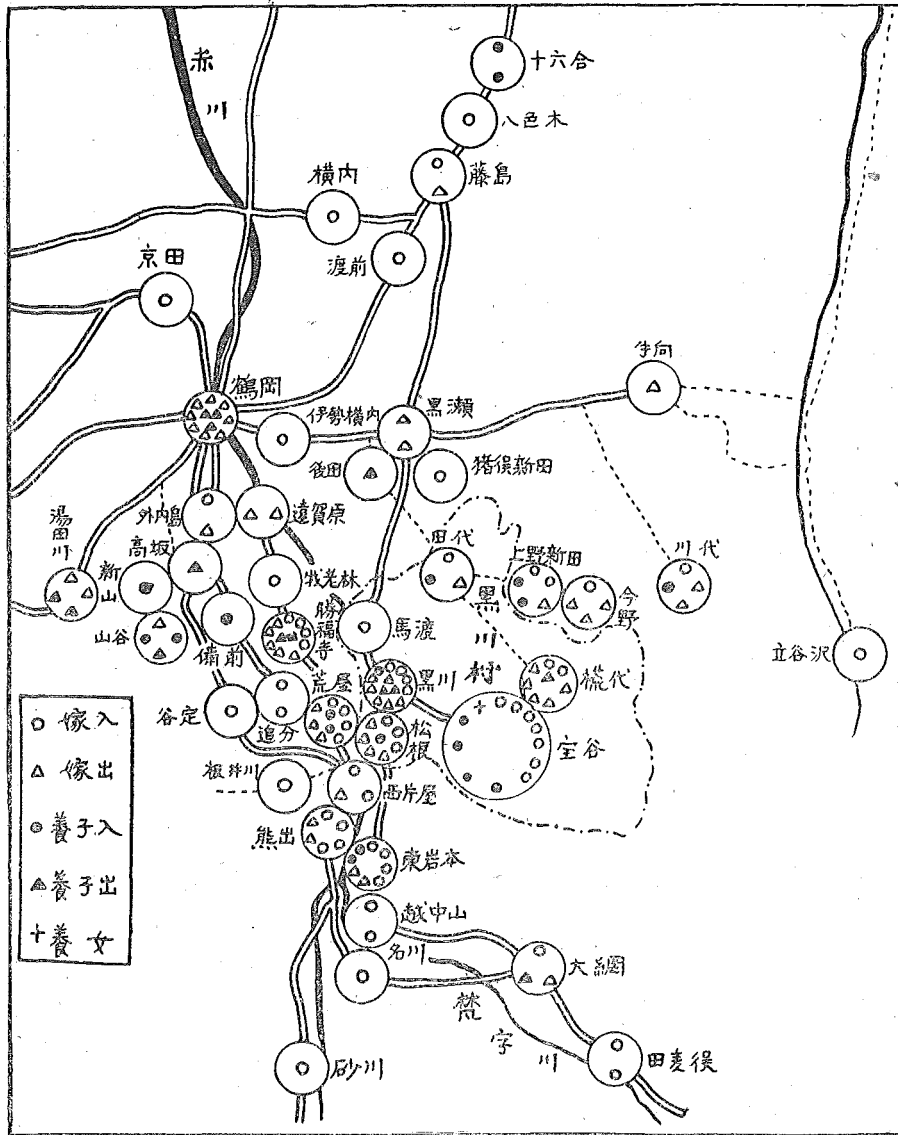
なお明治8年から同10年までの間に行われた縁組の頻度は養子出が黒川と松根に各1件で嫁入が同部落内で1件、西田川村林福に1件、嫁出が鶴岡に1件、飽海郡松嶺と北海道小樽へ各1人づつ娼妓となつて出ているが、養子縁組と婚姻は同村内の分が絶対的に多く明治8年の傾向と同様である。明治初年の宝谷部落の血縁的紐帯の状況は以上のようなものであるが、事情はその後現在に至る間に如何ように変化したか次に示さう。

2. 昭和27年に於ける血縁的紐帯事情

(1) 血縁関係：昭和27年2月現在宝谷部落在従者及び

他出者について嫁入、嫁出、養子入、養女入、養子出を調査すると次のようである。

この表に示すように宝谷部落の婚姻関係に於て明治8年頃と現在とでは事情は必ずしも同じではない。部落内での婚姻の頻度の比率は明治8年に比して著しく小であるが、嫁入、婿出と養子入、養子出とではほぼ同数である。黒川村内からの嫁入(部落内嫁入を除く、以下同じ)の22%、嫁出は27%、養子入は20%、養子出は25%、婚姻数合計45件で総数の30%に当り依然として多い。且つ東京都



への嫁出1件を除き他は悉く山形県内であり、しかも寒河江町への嫁出1件、宮内町への養子出1件を除いては残りは悉く24軒を超えない範囲内で行われていることは76年前と事情は異なっていない。ただこの期間に於て養子でなく単身部落を出て居を構えるに至つたものが同村内に1件鶴岡市、新潟市、盛岡市及び北海道に各1件あるのが見受けられる。かように婚姻関係から見た宝谷部

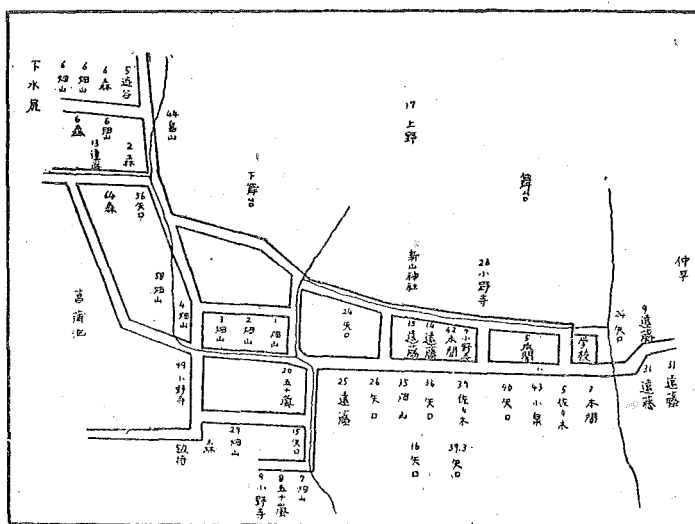
落の血縁的紐帯は昔に比べて現在も殆んど変つていないと見なければならぬ。

(四) 分家と戸の増加：明治8年22戸であつた宝谷の戸数は昭和26年末には48戸に増加した。すなわち76年間に倍増したことになる。この増加戸数のうち3戸は外部からの移住であるが、そのうち1戸は宝谷から同村内の梳代部落に嫁入つた先が1家を挙げて入部したのであり、他の1戸も同村内で然も部落続きの他部落から、なお他の1戸は鶴岡市からの移住で、何れも縁故関係にあるもの入部に過ぎない。その3戸を除いた残りの23戸は部落内の分家のみであるから、これら戸の姓は従來の9の姓と変りが無い。ただ戸に依つて分家数を多く出したのと分家せずそのままのものとの差があるだけである。

姓	小泉	小野寺	五十嵐	佐々木	遠藤	本間	矢口	畑山 (島山)	森	澁谷	劔持	上野
明治8年戸数	1	2	2	2	3	1	5	3	3	—	—	—
昭和26年戸数	1	4	2	2	7	3	9	12	5	1	1	1

(3) 結 言

以上の調査資料から次のような想定が浮んでくると思う。宝谷は最初に誰が拓いたかはこの資料では判らないが、見性寺の過去帳から今から210数年前、既に現在と同じように9つの姓を名乗る人達に依つて部落が形成されてたことは疑うべくもない。その後戸数が増して明治8年には22戸となつた。22戸に増すまでには恐らく数百年を経ていることであろう。大正7



年頃は24戸であつたと言うから、この期間の43年間には僅か2戸増しただけで殆んど戸数には増減がなかつたと見てよい。この増加の過程は分家又は縁故に引かれるといつたような血縁的紐帯を拡大するという方向をとつている。すなわち宝谷部落はこの血縁的紐帯の部落構成の基礎の上に産業的に、経済的に社会的に封鎖自給圏を成立せしめていたのである。かような自給圏を作つた基本的要因は何んであるかと言へば、それは無自覚ではあるが住民が祖先來持ち傳へて來た世をはばかりの穩通的性情と交通不便な環境(特に積雪の多い冬季)に位置することと、田畑山野の豊富な資源を保有していることにあつてゐることができよう。かくこの部落をして孤立の状態に置くことが、その住民をしていよいよ血縁的紐帯を強くしました強くする組織を作つて、社会、経済、生活の各方面に於て自立態勢を整えしめることになつたと思われる。

その後34年経過した今日に於て戸数は倍增したが、増加の状態は從來同様分家による血縁的紐帯の拡大である。ただこの期間に起つた從來と異つた現象は3戸の入部と5件の他所への移住である。前者の入部は附近から縁故者又は血縁者に依つて行われたものであるから血縁的紐帯関係への還元と見るべきで特に考慮を要しないが、後者の移住については検討の價値があると思う。これらの移住が都市に向つて行われていることは、よりよき生活を欲求する積極的動機に依るのか農業嫌忌の消極的のものか何れにしても前期には見られなかつたことである。

このことは最近の期間中に住民の間に血縁的紐帯に関する心理的變化や封鎖生活を解体する社会的経済的要因が現われて來て、封鎖状態を單なる傳統的因習的のままのものとして持続し難い意識の芽ばえ

が現われて来た見ることを意味するものであろう。そうだとすればこれからの宝谷部落は共同体的な原始社会の状態をこのまま持続して行くために如何なる主体的な綱領を創造するか、また個々の家が利益社会的状態を作つて行くとすれば如何なる共通利益を協定するかは、宝谷部落の將來の構成上残された問題として考究さるべきであらう。

この小論文をものするに当つて古島敏雄著山村の構造、福尾猛市郎著日本家族制度史、矢内原忠雄著植民及植民政策、福武直著日本農村の社会的性格、篠原泰三・朝倉孝吉訳グリスムオード農村と河合悦三著農村の生活、中川善之助著日本の家族制度、特に婚姻関係については長井政太郎著飛鳥誌に教えられるところが多かつた。図表の作成には金内英司氏に面倒をおかけした。

Summary

The aim of these studies is to explain how farming condition are effected by the change of family conditions, which was released from the headship of a home by the New Constitution of Japan. As a premise, in order to know the family conditions in early days of the meiji times, I have inquired the frequencies of Marriage, took placed at the hamlet of Hoya. The result of this research we can understand that its large parts concentrated at this hamlet or its neighbouring hamlets. Nowadays the condition of family connection is resemble to the early days type. But in these days, we can find out that there is a bud of disbanding of blockade family connection at this famlet, by the emigration of few persons to other localities.

して頂いたが丁度この頂上で屋敷を大勢の下記参拜者達と共にした。(所要時間4時間)本コースは濕地帯を通過するので採集には一段の興味が感ぜらる。アヲモリトドマツの森林は、1,300米位迄差達している様だが私は現場を見る迄は台湾のニヒタカトドマツ (*Abies Kawakami* ITO) 林を思い浮べて、さぞ立派な森林があるのだろうと想像していたのであつたが余りの貧相に驚ろかされた様な次第であつた。又井戸岳には立派な噴火口が見られる由で健脚者は一寸窺かれるのも一興であらう。大岳と井戸岳との中間凹地でガンコウランが敷きつめた絨壇の上に暫時横臥しての休息はこの上なき安樂である。此の日、8月31日は大岳山頂の山神様の例祭日である。当日は主として温泉旅館従業員男女数十名が特に40~50才の婦人達は白装束に身を潔めそれに湯治者も混つて一行100名程が颯々長蛇の列をなして御神酒と御供物を用意して笛、大鼓を奏し乍ら一同それに和して面白い節で歌いつつ登山して行く。上り下り路とも平坦地に來ると白装束の女達は狂つた様に乱舞し歌いまくる。頂上の社前には御供物を供え各人思い思いに礼拝する。斯くして8軒の道を廻り終えて温泉旅館に着くと、其処で一入盛んに笛、大鼓、乱舞、歌が繰り返えされ、見物人の人山が作られる。間もなく一同は引揚げてゆくと彼女達は入浴して夕食

を終えれば明朝迄は白河夜舟であらうが数日間は足腰も立たぬのではないかと人ごぞ乍ら氣にかかる。さてこの行列の先導を承はるのは笛の主である。土地の名物男である。其の名は鹿内辰五郎氏。氏は明治35年に青森歩兵聯隊の雪中行軍が吹雪の爲め一ヶ聯隊が殆んど全滅したと云う惨事があつたが、その折搜索隊の喇叭手として参加したと云ふ人で齡70才を越えているが体軀頑健壯者を凌ぐ感がある。又その装束たるや日本手拭の鉢巻に金紙で作つて五幣を狭み、国防色の上衣の胸から腹にかけては彼が現在迄に獲得した凡ての徽章や勳章をつけ、左肩から右下へ當時の喇叭を吊り半ズボン地下足袋姿である。笛は仲々上手である。一行中一盲人が妻君に助けられ乍ら登山、最後迄落伍しなかつたのは見事であつた。以上当日の思出を書き留めたが以下其の日の採集品を記する。

1) 酸湯より大岳頂上迄。

ハヒマツ、マイヅルサウ、ミネカヘデ、ミヤマアキノキリンサウ、ミネヤナギ、キツネヤナギ、ツマトリサウ、ハクサンチドリ、ヨツバヒヨドリ、ミヤマハンノキ、ミヤマホツツジ、ムラサキススキ、イハガリヤス、ガンクビサウ、リョウメンシダ、ヤマハハコ、ノリウツギ、ゴマキ、オホハナヒリノキ、シンガシラ、サハ